

「中国古典思想・文学」の特集にあたって

編集部

中国の長い歴史の中で、その古典思想、文学は中華文明の核であった。歴史を回顧すれば、三皇五帝から禹を始祖とする夏へさらに殷周へと、神話伝説時代から歴史時代へ移行する中で、思想では儒家を初めとする諸子が百家争鳴し、儒学の古典である四書と『書経（尚書）』『詩経』などの五経が生まれた。文学では、周代の詩歌を編纂した前述の『詩経』や、屈原らの詩歌を編纂した『楚辞』が生まれた。

その後秦による郡県制の全国的施行にもとづく中央集権的官僚制統一国家の出現後、前漢時代、董仲舒による儒学の国家教学化により、儒学は現実と切り結んでその思想内容を発展させる面を弱体化した。後漢滅亡後、六朝時代は、外来の仏教と老荘思想や道教が盛んになった。一方文学では、六朝時代に怪異を誌すという意味の志怪という物語の分野が生まれ、唐代になると文言で書かれ作者の創作という性質を備えた伝奇という分野が生まれた。また詩では六朝時代には五言詩が隆盛となり、その後初唐・盛唐・中唐・晩唐の中国史上の詩の最盛期が到来した。

宋代になると経済力の発展にともない都市の庶民のための講釈や芝居などが瓦子と呼ばれる演芸場で演じられた。そしてこれらの講釈師の台本がもとになって元末明初には、白話小説の傑作で四大奇書と呼ばれる『三国演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』が生まれた。さらに元代には庶民文化として雜劇が発達し、戯曲として『西廂記』『漢宮秋』『琵琶記』が生まれた。

また宋代は儒学の歴史の中でもめざましい発展の時代で、仏教や道教の影響を受けて哲学的思考を深めるとともに、遼、西夏、金などの外敵に直面して、大義名分論によって君臣や華夷の別を強調するなど、現実と切り結んで国家の政治や個人の現実の生活との結びつきを深めていった。この宋学の流れは、北宋の周敦頤から始まり、邵雍、張載、程頤、程頤を経て南宋の朱熹によって大成された。一方、南宋の陸九淵の流れを汲む明代の王陽明は「心即理」「知行合一論」を唱えて、朱子学と対抗して王学の祖となった。明末清初になると、王学による「心性の空談化」を批判し

て「経世致用」を唱える黄宗羲、顧炎武、王夫之が出現した。また彼らは「実事求是」をモットーとする考証学でも名高い。

文学では、清代には文言で書かれた『聊齋志異』、白話小説では『儒林外史』、『紅樓夢』等の傑作が生まれた。

その後近代になって、中華民国時代の新文化運動の中で、二千年来の専制主義の精神的支柱としての儒教思想の批判が行われ、また「文学革命」の中で魯迅に代表されるような白話による近代的小説が生まれた。

しかしながら最初にも述べたが、古典思想、文学は中華文明の核である。特に古典思想、とりわけ儒教観念は、今なお多くの影響力を持っている。

ごく最近の事例をとっても文革時には、孔子廟や儒教関係の遺跡に対する破壊運動および「批林批孔運動」が為政者による政治運動として展開され儒教は徹底的に批判され、その後改革開放以後、八〇年代には「河殤」に代表されるような全面的な西欧化の主張により伝統的な文化が否定されることもあったが、天安門事件を経て、九〇年代においては新国学の隆盛となっているし、また民衆のレベルでも、たとえば本特集の座談会で述べられているように、中国の農村における宗族の存在と宗法の残存があり、そこでは宗族の始祖に対する崇拜が行われるなど儒教的価値観が生命を持っているし、また最近の「二人っ子」政策の中で、

一人っ子同士が結婚した場合に、年輩いた双方の両親に「孝」を尽くすためにどちらが面倒を見るのかという問題も、欧米世界では生じない問題であろう。

以上のような古典思想、文学の重要性に鑑み、本特集では、演劇と古典文学研究のお二人の大家を囲む座談会、伝統思想とその近現代への革新の問題についての思想史の専門家を囲む座談会を掲載したほかに、擬古派の否定した夏の始祖禹の存在について検証した論考、「隸古定字」で書かれた『書経（尚書）』が唐代に楷書体書きかえられたことについて分析した論考、自然界の様々な存在と現象について関係性に着目して行われる類推思考を中国の古典に求めて分析する論考、屈原の代表作「離騷」が漢代においてどう読まれどう語られたかを通じて漢代の屈原像を分析する論考、六朝期において命定論と呼ばれる運命論がなぜ主張され続けたか、さらにそのような命定論と人為との関係を分析した論考、宋学の張載の思想について分析する論考、四大奇書の一つ『金瓶梅』の言葉あそびについて分析した論考をそれぞれ執筆の方にご寄稿いただいた。お忙しいなかを座談会にご出席いただいた方や、ご寄稿いただいた執筆者に感謝する。

（馬場毅）